

浜松市天竜区龍山町における民間口承文化財（昔話）の採録調査

静岡文化芸術大学 文化政策学部 二本松康宏ゼミ

指導教員：教授 二本松康宏

参加学生：稲葉夏鈴、岡田真由子、小林由芽、玉置明子、中谷文音、毛利とわ

1. 要約

浜松市天竜区龍山町において民間口承文化財（昔話）を調査・採録し、その記録、保護・保存、そして公開と継承を目指す。

昔話は無形の文化財である。地域に伝わる伝説や家庭に受け継がれた昔話は、その土地に生きた人々の心と記憶の遺産であった。しかし、近年の加速度的な高齢化と過疎化によって昔話の伝承も急速に消え去ろうとしている。それは地域におけるコミュニティとアイデンティティの危機でもある。

二本松ゼミ（伝承文学）は、平成26年度から3年間にわたる同区水窪町での実績（『水窪のむかしばなし』『みさくぼの民話』『みさくぼの伝説と昔話』の刊行）を継承し、平成29年度は龍山町における昔話の採録調査を実施した。採録した語りは「方言のまま」「語り口のまま」に翻字する。そのなかから学術的価値、記録的価値を精査し、伝承地域等の解説を書き添えて、書籍（『たつやまの昔話と伝説』）として刊行する。

浜松市天竜区龍山町

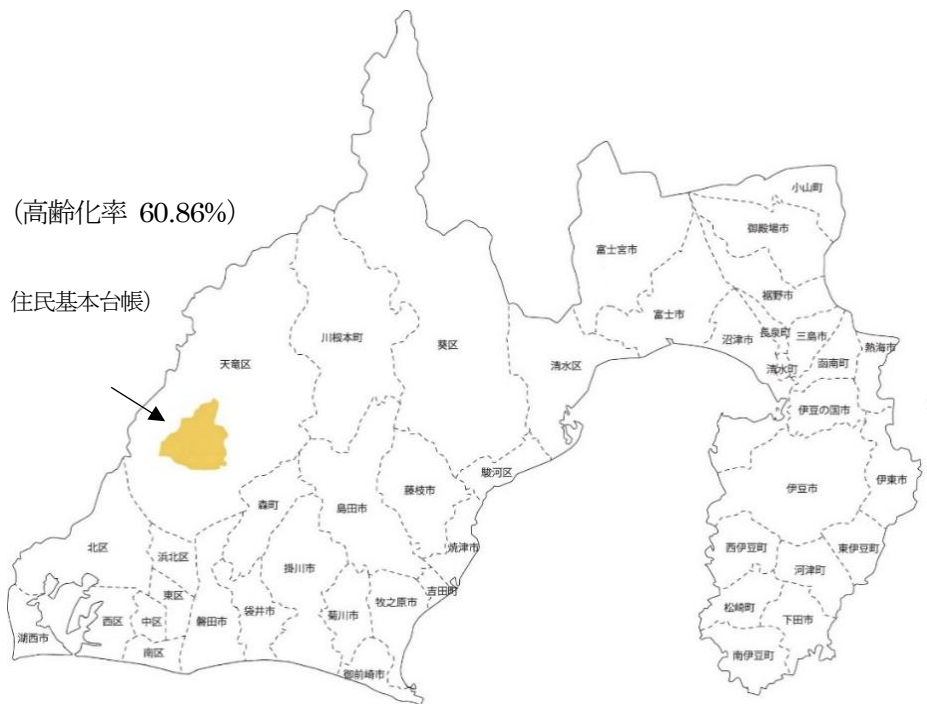
世帯数 330 世帯

人口 646 人

65歳以上の人口 393 人（高齢化率 60.86%）

14歳以下の人口 11 人

（平成29年10月1日 住民基本台帳）



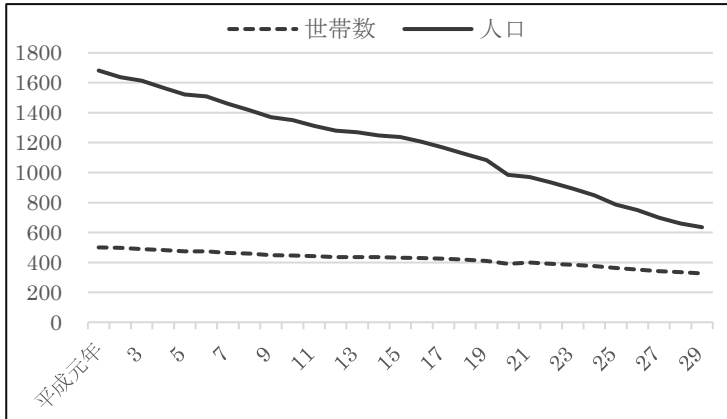
龍山の略年表

明治34年（1901）	龍川村のうち大嶺と戸倉、山香村のうち瀬尻と下平山が合併し、磐田郡龍山村が成立。
昭和31年（1956）	峰之沢鉦山の最盛期。秋葉ダムの建設特需。人口は13,000人を超える。
昭和33年（1958）	秋葉ダム、完成。人口は約6,600人まで減少。
昭和45年（1970）	峰之沢鉦山、閉山。人口は約3,000人まで減少。
平成17年（2005）	天竜市、春野町、佐久間町、水窪町など2市8町とともに浜松市へ編入。
平成19年（2007）	浜松市は政令指定都市に移行し、龍山町は天竜区龍山町となる。
平成20年（2008）	龍山中学校、閉校。人口が1,000人を下回る。
平成26年（2014）	龍山第一小学校、閉校

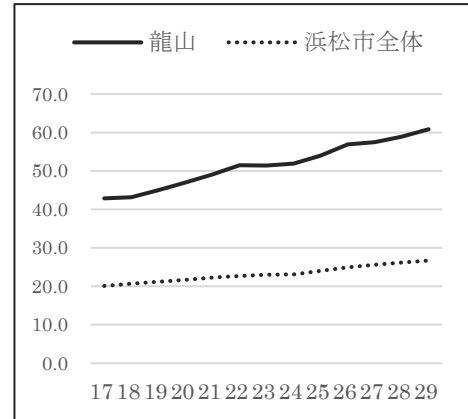
2. 研究の目的

(1) 龍山における高齢化と少子化

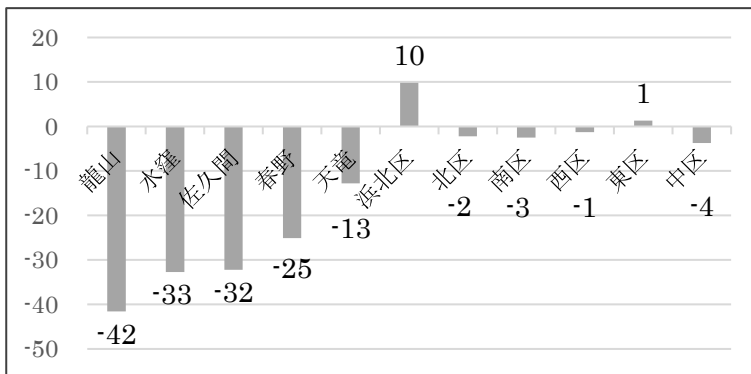
龍山町は人口 646 人のうち、65 歳以上の高齢者が 393 人、高齢化率は 60% を超える。静岡県内でも屈指の高齢化と過疎化が進んだ地域である。高齢者たちは孫と暮らすことが少なく、自らが幼いころに聞いた昔話を次世代に語る機会がないまま、その伝承はまさに消え去ろうとしている。



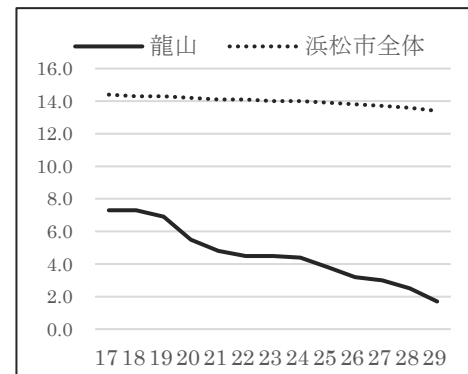
龍山の人口と世帯数の推移



65歳以上の人口比率（高齢化率）の推移
平成17年（浜松市への編入）～平成29年



浜松市旧市町村の人口の増減率
平成19年（政令指定都市への移行）～平成29年



14歳以下の人口比率（少子化率）の推移
平成17年（浜松市への編入）～平成29年

(2) 龍山における昔話の伝承状況とその課題

昭和53年（1978）には、地域アイデンティティの再生を目的として、龍山村に伝わる伝説27話を収めた『ふるさと夜話』が旧龍山村教育委員会により刊行された。また平成13年（2001）には村制100周年を記念し、その改訂版として『たつやま昔話』が刊行されている。しかし、残念なことに同書には掲載された27話はすべて「昔話」ではなく「伝説」に分類されるものであり、しかもすべて標準語によって語りが整えられている。そのため口承文化財の記録としての価値・評価は限定的と言わざるを得ない。

※ 伝説と昔話の違い

伝説 … 時代や場所を特定し、その土地では歴史的事実のように信じられている。伝説をよく知る人は、その地域で「古老」「ものしり」として知られているため、採録調査は比較的容易。一般的に男性の語り手が多い。

昔話 … 時代と場所を特定しない話（むかしむかしあるところに）。一般的に女性の語り手が多い。多くの場合、家庭内で「子どものおとぎ話」として語り継がれてきたため、他人の前で話すことは自分の教養のなさを露呈してしまう「恥ずかしいこと」とされがちで、なかなか表に出にくい。採録には高度な技術が必要。

3. 研究の内容

- (1) 2017年5月から2018年1月までの計画で龍山町全域での昔話の採録調査を実施する。
- (2) 龍山協働センター、社会福祉協議会龍山事務所との連携。地区の親睦会である「サロン活動」に参加。
- (3) 集会所における集団調査と自宅への戸別訪問。
- (4) 採録した話は記録価値などを精査したうえで「方言のまま」「語り口調のまま」に翻字・記録する。
- (5) 伝承の解説を書き添え、書籍として刊行する。



採録調査の記録

01	29年 5月28日 (日)	第1回採訪	西川集会所	15	29年10月21日 (土)	補足調査 ①
02	29年 6月 7日 (水)	第2回採訪	下村会館	16	29年10月28日 (土)	補足調査 ②
03	29年 6月10日 (土)	第3回採訪	戸別訪問/新道集会所	17	29年11月11日 (土)	補足調査 ③
04	29年 6月17日 (土)	第4回採訪	白倉センターふれあい/生島集会所	18	29年11月18日 (土)	補足調査 ④
05	29年 6月24日 (土)	第5回採訪	戸別訪問	19	29年11月19日 (日)	補足調査 ⑤
06	29年 6月27日 (火)	第6回採訪	戸別訪問	20	29年11月20日 (月)	補足調査 ⑥
07	29年 7月 1日 (土)	第7回採訪	戸別訪問	21	29年11月27日 (月)	補足調査 ⑦
08	29年 7月 4日 (火)	第8回採訪	戸別訪問	22	29年12月 2日 (土)	補足調査 ⑧
09	29年 7月 5日 (水)	第9回採訪	ドラゴンママ加工場	23	29年12月 4日 (月)	補足調査 ⑨
10	29年 7月 8日 (土)	第10回採訪	戸別訪問	24	29年12月 9日 (土)	補足調査 ⑩
11	29年 7月22日 (土)	第11回採訪	龍山老人福祉センター/戸別訪問	25	29年12月17日 (日)	補足調査 ⑪
12	29年 7月26日 (水)	第12回採訪	戸別訪問	26	29年12月18日 (月)	補足調査 ⑫
13	29年 7月29日 (土)	第13回採訪	戸別訪問	27	29年12月24日 (日)	補足調査 ⑬
14	29年 8月 5日 (土)	第14回採訪	戸別訪問	28	29年12月25日 (月)	補足調査 ⑭
				29	30年 1月14日 (日)	補足調査 ⑮
				30	30年 1月15日 (月)	補足調査 ⑯
				31	30年 1月20日 (土)	補足調査 ⑰

私たちのこだわり①…「語りのまま」「方言のまま」

近年では「語り部」として小学校や図書館などで昔話を語り聞かせる活動が広まっている。しかし、そうした活動では子どもにもわかりやすく標準語化され、あるいは再創作された話が大半を占めている。昔話は地域と家庭に伝えられた文化遺産である。標準語化や再創作は、いわば「文化財の改竄」に等しい行為である。未来に伝えなければならないのは「語りのまま」「方言のまま」の地域の文化遺産である。

私たちのこだわり②…書籍としての刊行

調査報告会やシンポジウムでの報告では、せいぜい100人か、多くとも200人ほどにしか調査報告を聴いていただけない。一過性の聴衆になってしまう。しかし、私たちが刊行してきた書籍はいずれも600部を刊行し、刊行後は1年以内に約500部が販売されている。公立図書館にも収蔵され、10年先も30年先も、ひょっとしたら100年先までも利用されることになる。



『水窪のむかしばなし』(平成26年度)

浜松市の6図書館をはじめとして県内18図書館に収蔵

『みさくぼの民話』(平成27年度)

浜松市の15図書館をはじめとして県内33図書館に収蔵

『みさくぼの伝説と昔話』(平成28年度)

浜松市の12図書館をはじめとして県内31図書館に収蔵



4. 研究の成果

(1) 当初の計画

龍山地区全域において採録調査を実施。採録した昔話は記録価値などを精査したうえで、「方言のまま」「語り口調のまま」に翻字・記録する。伝承の解説を書き添え、書籍として刊行する。

(2) 実際の内容とその理由

A（予定どおり）

(3) 実績・成果と課題

『たつやまの昔話と伝説』（二本松康宏監修、稲葉夏鈴・岡田真由子・小林由芽・玉置明子・中谷文音・毛利とわ編著、三弥井書店、2018年3月、定価1,000円（税別））を刊行予定。

(4) 今後の改善点や対策

龍山における民間口承文芸（昔話）の採録調査とその公開は今回で終了する。次年度からは春野地区において3ヶ年計画での採録調査を予定。集会所での集団調査ではどうしても男性の参加が多く、女性の参加が少なくなる傾向にある。昔話は男性よりも女性（母系・おばあちゃん）から伝播・伝承される傾向が指摘されており、採録でもできるだけ女性の語り手と出会うことが望ましい。



5. 地域への提言

龍山における民間口承文化財（昔話や伝説）の伝承は語り手たちの高齢化と急速な過疎化に伴って、いまや風前の灯火ともいえるべき状況にある。本来、昔話は世代を超えた地域文化の継承のためのコミュニケーション・ツールにもなり得るが、そもそも龍山には聴き手（つまり語り継ぐべき相手）としての役割を担わずの子どもが少なく、地域における昔話の継承はほぼ不可能と考えざるを得ない。

しかし、世代を超えた地域文化としての継承が望めないならば、同じ世代での相互継承を目指すことはどうであろうか。さいわい龍山では社会福祉協議会が斡旋する地域コミュニティの場として「サロン活動」が活発に催されている。そうしたサロン活動の場で、参加者たちが自分の聴き馴染んだ昔話や伝説を披露してはどうだろう。交互に語り手となり、聴き手となることで、龍山に暮らすことの誇りとアイデンティティに、もう一度、触れなおすことができるのではないだろうか。「そういえば、私はこんな話を聞いたことがあるけどね」と。私たちの採録調査がその“きっかけ”になれば嬉しい。

なお、私たちが刊行する『たつやまの昔話と伝説』は、浜松市をはじめとして全国の書店でも購入することができる。故郷・龍山を離れた人たちの想い出の縁(よすが)になればとも願っている。

6. 地域からの評価

上述のように昔話を他人の前で話すのは「恥ずかしいこと」と思われがちである。その恥ずかしい話を語っていただくために、私たちの採録調査は、まず地域の人々の信頼を得るところから始めなければならない。たったひとこと、たとえば自宅の裏を流れる沢の名を確認するだけでも、けっして電話で問い合わせをしない。かならず現地へ赴き、ご自宅を訪ね、お会いして尋ねる。「そんなことのためにわざわざこんな所まで」と呆れるお年寄りも多いが、そうした地道な努力と誠意が、きっと信頼に繋がってゆくと信じている。

はじめは私たちの採録調査を訝しがり、あるいは冷ややかでさえあったお年寄りたちが、会う数を重ねるごとに心を開いてくださるようになる。昔話を聴きに訪ねてきた学生たちを龍山のお年寄りたちは暖かく迎えてくださる。何日も前から学生が来るのを待っていてくださる方、私たちの活動が新聞に掲載されるたびに、我がことのように喜び、記事を切り抜いて保管してくださる方も多い。私たちは「地域の活性化とは一線を画し」などと高邁な理念を掲げてはいるが、実のところ「待ってたよ」「また来てね」というお年寄りたちの言葉こそが、私たちの採録調査への何よりの評価である。